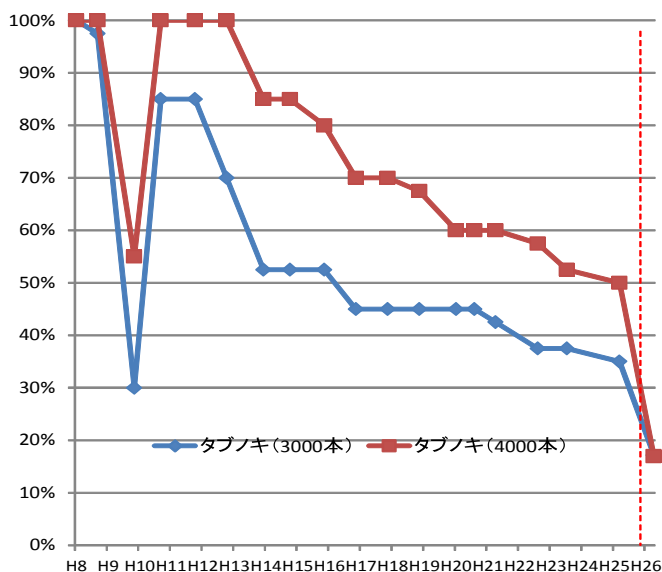


樹種名	タブノキ (別名: イヌグス)	
科目	クスノキ科	
学名	<i>Machilus Thunbergii</i>	
分布	東北地方から九州・沖縄の森林に分布し、とくに海岸近くに多い。	
樹木特性	陰樹であり、照葉樹林や二次林に生息し、暗い環境でも成長はし耐陰性がある。また、比較的長寿な樹種であるため稚樹が暗い環境にある程度耐え閉ざされた林冠の下でも前生稚樹を形成できる。幹が直立することから、萌芽更新を行う雑木林では株立ち状となり、萌芽力は強い。このことから、伐採すると切り株から萌芽する。萌芽発生本数が最大となるような切り株直径は約 20 cm 前後で萌芽本数は 20 本程度である。さらに、萌芽発生が見込まれる最大の切り株直径は約 40~50 cm である。生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は無い。	
用途	公園樹、建築材、家具・彫刻材として利用。タブ粉は線香や蚊取線香の材料の 1 つ (粘結材) として用いる	
植栽本数/面積 (植栽密度)	879 本 / 0.29ha (約 3,000 本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】</p> <p>タブノキはクスノキ科タブノキ属の常緑高木である。イヌグス・タマグス・ヤマグスとも称される。高さは 20m ほど。太さも 1m に達する場合がある。若い枝は緑色で、赤みを帯びる。芽は丸くふくらむ。葉は枝先に集まる傾向があり、葉は長さ 8~15cm、倒卵形。革質で硬く、表面はつやがあって深緑。</p> <p>花期は 4 月から 6 月。黄緑色であまり目立たない花を咲かせる。8~9 月ごろ球形で黒い果実が熟す。</p>	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽初期に、根は生きているものの幹枯れが多く発生したため、平成 9 年から平成 10 年に補植を実行した。コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。現存率 (補植を含む) は 17 % と低い結果となっている。成長量は順調に推移している。	
被害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ: 51 本、カミキリムシ類: 128 本)	

タブノキ 現存率



【現存率】

植栽後、2年を経過した頃、半数以上が枯死したため、平成10年に補植を行った。

その後は、コウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

林内の照度調整のため平成20年、22年、23年度にわたり3回の本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は17.2%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

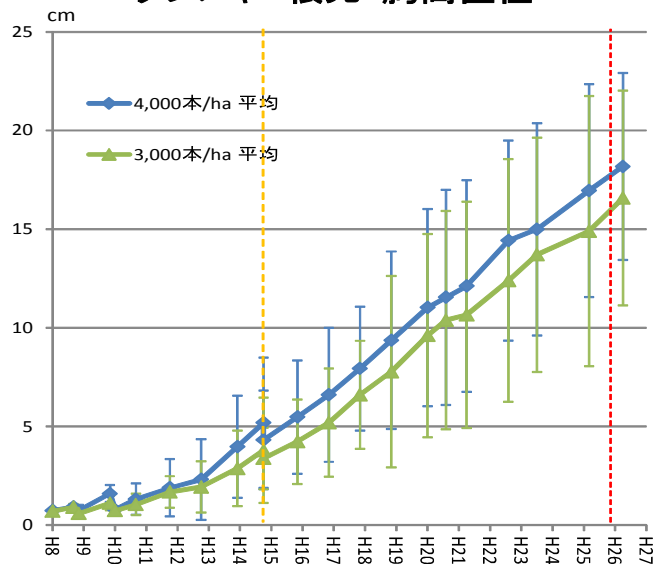
4,000本/haが3,000本/haよりも肥大成長がやや良い。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,000本/haの平均胸高直径は16.58cmであり、4,000本/haの平均胸高直径は18.18cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

タブノキ 根元・胸高直径



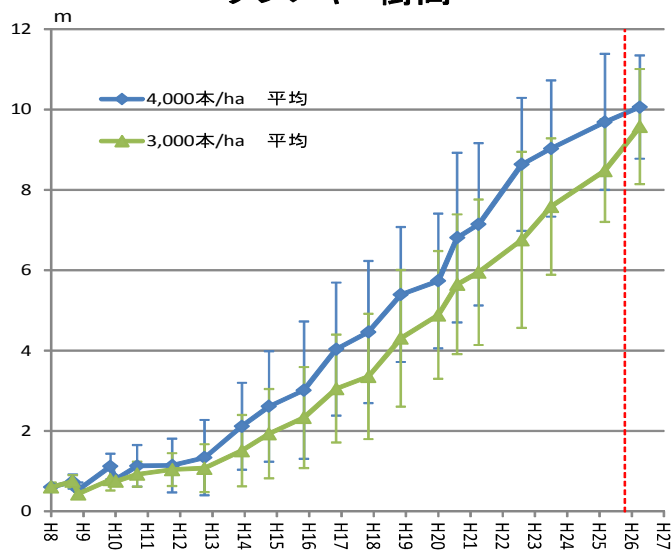
【樹高】

4,000本/haが3,000本/haよりも上長成長がやや良い。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,000本/haの平均樹高は9.58mであり、4,000本/haの平均樹高は10.06mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

タブノキ 樹高



《プチ情報》

照葉樹林の代表的樹種のひとつで、各地の神社の「鎮守の森」によく大木として育っている。また横浜開港資料館の中庭の木は「玉楠」と呼ばれ有名である。

枝葉には粘液が多く、乾かして粉にするとタブ粉が得られる。タブ粉は線香や蚊取線香の材料のひとつ(粘結材)として用いる。